

言語接触による文法変容と文法模造の研究 : 中古日本語に与えた仏典訓読の影響を中心に

劉, 洪岩

<https://doi.org/10.15017/1500738>

出版情報 : Kyushu University, 2014, 博士 (芸術工学), 課程博士
バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

氏 名 : 劉 洪岩

論文題名 : 言語接触による文法変容と文法模造の研究 - 中古日本語に与えた仏典訓読の影響を中心に -

An Empirical Study of Contact-induced Grammatical Changes and Grammatical Replications: Focusing on the Effects of the *Buddhist Scriptures Kundoku* on Early Middle Japanese

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、言語接触の影響を受けて生じる言語変容に関する事例研究について論じたものである。研究の目的は、記述形式の言語接触によってどのように文法変容が引き起こされるのか解明することである。

研究の方法は、仏典訓読資料を用い、言語接触の領域であまり議論されてこなかった、中古期の日本語と漢文の言語接触による文法変容に関して分析考察を行う。

研究の結果、仏典訓読という記述形式の言語における接触によって現れた文法模造現象の類型論的な特徴が明らかになり、記述形式の言語の接触における言語変容と文法模造の構造を解明することができた。

本研究の意義は、漢文訓読資料の使用によって言語接触の影響に関する研究方法の多様性を示すとともに、従来、顧慮されなかった記述形式の資料に注目し、より広い視点を持って研究した結果、言語接触による文法変容と文法模造に関する理論を体系的に構築することができた点にあると考える。

本論文は、序章、第1章～第6章、結章によって構成される。論証の内容として次のように要約される。

第1章では、まず、言語接触の概念と諸類型を提案する。その上で、漢文訓読の本質は注釈記号を用いる特殊な翻訳なので、一種の言語接触の現象として捉えることが出来ることを明確に述べる。従来、研究されてきた言語接触の現象と違い、漢文訓読は、一種の記述形式の接触だと分析し、さらに、その特徴から、漢文訓読という記述形式の接触は、間接的、長期的、同系関係のない言語の接触類型に属するという位置づけを行った。

第2章では、本研究に使用する調査資料の選択について説明した。本研究では、主として仏典の訓読資料を使用する。その理由としては、漢訳仏典の渡来及び訓読は漢籍とまったく別の言語接触の過程をたどっており、日本語に及ぼした影響には独特の特徴があると考えられるからである。また、漢訳仏典とその訓読の文法上の特徴は直訳性と口語性であり、中古期の漢籍と異なり特徴的な漢文法が反映されていることについて述べた。

第3章では、漢文訓読のような言語接触による文法変容は外的な影響と内的な変化の相互作用の結果として見られる現象であることについて議論した。つまり、接触の過程における漢文の影響は、文法変容をもたらした外的誘因である。輸入された要素が、日本語の文法体系に適合する形式に置き換えられる過程は内的な変化である。また、言語接触による文法変容は本質的に文法模造の過程である。文法借用と異なり、文法模造は文法項目の音声形態と直接の関係

はなく、文法機能と統語構造のような構成法則が転移するのである。漢文の文法モデルを真似て、日本語に固有の要素が新たな文法項目に変化したと考えられる。文法模造は、「語構成模造」、「統語機能模造」、「統語構造模造」の三つの類型に大別される。この三つの類型は、本論文の骨子となるものであるが、それぞれ形態素の語構成形式、接触による文法化、語順の構造などの具体的な構成法則の変化に関わっている。第3章で立案した言語接触による文法変容の理論的枠組みに基いて、第4、5、6章では仏典訓読の事例を通して、文法模造の下位類型となる「語構成模造」、「統語機能模造」、「統語構造模造」の特徴について考察を行った。

第4章では、主として訓読のような接触による語構成模造について考察した。語構成模造の本質は、言語接触による形態素結合の規則の変容であり、言語間の深層的な統合的關係に関わっている。漢文訓読による日本語の語構成の模造において、形態素結合は「分析的」な語構成規則から「総合的」な語構成規則に変容すると論じた。語構成模造は「複合化」、「接語化」、「接辞化」の三類型に分けられる。これらの変容はいずれも語間境界を形態素間境界に再分析する形態化の過程である。漢文との接触によって、日本語にはもともとなかった語構成の規則が模造され、語連続の語間境界がなくなり、一語化する。したがって語内要素とは異なる成分が形態化して語構成の形態素に変容することを指摘した。

第5章では、訓読接触による統語機能の模造について考察した。統語機能の模造は統語要素と統語環境の二つの側面からの影響によって模造言語に新たな統語機能が成立する過程である。その本質は接触による文法化であり、動機づけは言語接触である。この過程において、模造言語はモデル言語の文法項目や文法範疇の文法化の過程に影響され、新たな統語機能を持つようになる。日本語は類型特徴が漢文とは違うため、訓読上のゆれや不整合を生じ、そのため多様な文法化の類型が見られる。接触による文法化は脱意味化、拡張、脱範疇化という三つの変容要素を持っている。これらの変容要素は言語内部の文法化の要素とは異なる特徴が見られることを明らかにした。

第6章では言語接触による統語構造の模造について考察した。統語構造の模造とは、模造言語の話者がモデル言語の特定の統語構造を真似て、模造言語における構成要素を利用し、自分の言語に新たな統語構造を造り出す変容である。この部分は主要部と付加部の構造変容の考察を通して、漢文訓読のような言語接触は日本語の「基本語順」にまで影響を及ぼすことはなく、「表層的な統語構造」のレベルで変容が起きることを明らかにした。漢文訓読による日本語の統語構造の変容は、一般的に呼びかけ・感嘆のような「語用論的な有標」の場合に発生する「表層的な統語構造」の語順刷新の現象であることを提案した。